

出会いの解釈学

—— 考えることを喪失した時代に ——

的 場 哲 朗

「考える」ということになにか話をしてもらえないか、と相談を受けました¹。きつと、わたしが哲学を教えていますから、哲学なら「考える」というテーマがピッタリだとわたしに依頼して来られたのだと思います。テーマが先だったか、人選が先だったか、それはわかりませんが——。ともあれ、ご期待に副うように努力したいと思います。しかし、どこまでうまく応えられるかは疑問ではありません。なにしろ、今年（一九九四年）の夏の暑さはわたしにはとても耐えられるものではありませんでしたから。

今年の生井大学の統一テーマは「出会い」だと聞いております。皆さんとこの公民館でこうして出会えたことも、りっぱに出会いたいことになりましょう。また、そうなるように努めたいと思います。

さて、今日は、統一テーマの「出会い」というところから出発して、「考える」ということを振り返ってみたいと思います。「考えること」をテーマとして話をするのではなくて、むしろ皆さんと一緒に「出会い」の意味を考えることによつて「考えること」を身をもって掘り起こしてみたいと思うわけです。案ずるより産むが易し。考えることは、こ

れについてくよくよ考えるよりはむしろ実際に考えてはじめて実りがあると考えます。それに、こんなふうに通つていくのがごく普通のことです。ごく当り前のことだとわたしは信じるからです。哲学においては、この当り前のことに目を向けていくことが大変重要でです。

つぎの順序で話をすすめたい、と思います。

- 一 出合いのパラドックス——その構造と意味。
- 二 哲学と出合い——ソクラテスが教えたこと。
- 三 現代と出合い——考えることの喪失の時代

この順序を少し内容に立ち入って説明しますと、まず最初に、わたしたちの日常生活の中で起こっている出合いの構造と意味を取り出します。日常性の分析とでも呼びましようか。ついで、その構造と意味を手掛かりにして、ソクラテスという哲学者がわたしたちに教えてくれたこと（哲学）に目を向けてみることにします。歴史の発掘ということになります。この発掘を手掛かりに、最後に、わたしたちの時代、つまり現代というものに省察の目を向けてみたいと考えています。まさしく現代批判です。

一 出会いのパラドックス—その構造と意味

「出会い」とはたまたま会うことです。予測も期待もせずに、突然ぱったりと会うことをいいます。遭遇するわけです。「出会い頭の事故」といいますが、まさしくそれが出会いということです。ぱったり「出くわす」わけです。山中で熊に出会った、といえはその意味がわかるかと思えます。ドイツ語に *treffen* という言葉があります。「命中する」、「当たる」をもともとは意味しますが、ここから「出会う」「出くわす」という用い方も出てきます。Ich *treffe* ihn auf dem Spaziergang. と言えは「わたしは散歩の途中で彼に出会う」を意味するわけです。同時にそこには、突然、予測もしないのに正鵠を得たように、ぱったりと遭遇するといったニュアンスも込められています。これと似た言いまわしで *betreffen* という言葉があります。「突然、予想もしないのに」といいましたが、この *betreffen* になると、その突然、つまり偶然性の度合いが増して、まさか誰にも会わないだろうと思っているところを「急襲」され、「捕え」られる、といった突発的なニュアンスが込められます。Ich *treffe* ihn bei den Lesen ihres Briefes. といえは「彼が彼女の手紙を盗み読んでいるところをわたしは「思いもかけず」見つけられる」を意味し、そこには、思いもかけない現場を捕えた、という突発性だけでなく、そんなところを急襲されたことに対する負い目のような恥かしさも込められています。出会いには、こんな偶然、思いもかけなき、負い目のようなものが不可欠の要表、たといえましよう。

これに対して「会う」は、これとよく似てはいますが、あらかじめ示し合わせて、それなりの場所であいまみえるわけですから、「出会い」とニュアンスと違ってくる。 「駅で会いましょう」という具合に。そこでは予測や期待が最初から込められていますし、状況も場所も先刻承知ということになります。男女が会う、といえは、ふたりはひそかに

(ひとによっては堂々と) 示し合わせているのです。

今出会いとか、会うとかテーマにしましたが、こんなことは別段とりたてて珍しい出来事ではありません。むしろ、ごく当り前の、誰でも体験する、ごく日常的な出来事ではないでしょうか。哲学においては、こうした当り前の事柄が一番大切なのです。

さて、出会いは偶然でなければなりません。かならず、必然的にそうなることあらかじめ決っていたのであれば、出会いはありません。

「熟視じゆくしめたり——白糸たぢまは忽たちまち色いろを作なして叫なびぬ。」

『あら、まあ！金様かねさまだよ。』

欄干らんかんに眠れるはこれ余人これよりのひとならず、例たとの来合馬車きあばぐるまの馭者ごしやなり。

『どうして今時分いまときばん這こん様さま所にねえ。』

『何方どなたでしたか、一向存ぞんじません。』

『はてな。』と馭者ごしやは首くびを傾かけたり。

『応！そうだ。』横手で拍ちて、馭者は大声を発せり。白糸はその声に驚かされて、

『ええ吃驚した。ねえお前様、覚えて御在だろう。』

『うむ、覚えてる。さうだった。さうだった。』⁽²⁾

出会いはあくまで偶然です。必然であつては絶対にいけないのです。偶然と必然はいわば“水と油”のようなものでしょう。ですから対立し合うのです。

しかし本当にそうでしょうか。出会いが偶然であることはいうまでもありませんが、しかし出会いが偶然のままに終わってしまうとしたら、実は「出会い」とはいえないのではないのでしょうか。出会いは偶然ですが、しかしこの偶然の出会いの中になにか意味のようなものを嗅ぎ取り、これを読み取つてはじめて、本当の出会いには成り立つてくるのではないのでしょうか。“会うは別れのはじまり”ですが、同時に出会いは読み取りのはじまり、本当の意味の発見のはじまりでもあるのです。なにか意味のようなものを、なにか必然の力のようなものを読み取ることができてはじめて、ひととひととの出会いは本当の力を得てくるわけです。友人、恋人、恩人、奥さんや旦那さん、仕事、大学入学などとひとはいろいろなものとお会いしますが、これが偶然に終つていようであれば、なんの意味もない、ただの遭遇、ぶつかり合いにすぎません。この偶然の出会いの中になにか意味のようなものを、なにか必然のようなものを読み取つたときにはじめて、それを嗅ぎ取つたときにはじめて、出会いが本当の意味での出会いとなるのです。

「おちや貴方、御出なさいな、ねえ、東京へさ。もし、腹を立つちや可けませんよ、失礼だが、私が仕送つて上げよ

うぢやありませんか。』

……

馭者は美人の意をその面に読みとしたりしが、能はずして遂に呻出せり。

『何だッて？』

美人も希有なる「面色」にて反問せり。

『何だッてとは？』

『どういふ所以で。』

『所以も何もありません、唯お前様に仕送がして見たいのさ。』

『酔興な！』と馭車はその愚に唾するが如く独語ちぬ。

『酔興さ。私も酔興だから、お前様も酔興に一番私の志を受けて見る気はしないかい。ええ、金様、どうだね。』

……

『縁といふのも始は他人同士。ここでお前様が私の志を受けて下されば、それが畢竟縁になるんだらうぢやありませんかね。』

出会いは美は、偶然と必然のせめぎ合い、混ざり合い、その総合、その統一の中に成立するといふことができましょう。パチンコ玉が偶然にぶつかり合うのとは根本的に違うのであります。

フランスの十七世紀の哲学者パスカルは『パンセ』の中でこんなことをいっています。ひとは自分の仕事——よく

「天職」などといいますが——に出会ったことをまことしやかににか必然でもあるかのようにとくとくと説明しますが、そんなことはない、天職なんてたまたま偶然にそうなっただけのことにはすぎない。天職など、あとから理屈をひねり出しているにすぎない、と述べています。人生万事この程度のもの、すべては偶然に委ねられているにすぎない。歴史だってクレオパトラの鼻程度のことでは動いたではないか。パスカルはそういうわけです。熱烈なクリスチャンであるパスカルにとつて、こんなふうな人生が偶然に左右されていることほど恐ろしい、不安なことにはなかつたことでしょう。そこから彼は、『パンセ』という彼独自の弁神論を書くことになるのですが、その弁神論の話はともかくとして、天職としての仕事もよく考えてみれば、たまたま偶然にそうなっただけにすぎないというパスカルの指摘はたいへん面白いと思います。重要なことは、わたしたち人間はこうした偶然なこと(仕事)も天職と名づけて、そこになにか天の力のようなもの、必然のようなものが働いていると見ているという事実です。わたしたちはつまり、そんな偶然な出会いに対しても意味のようなもの、神や仏様の意志のようなものを発見するわけです。何か強い運命に翻弄されていた、と(いわば勝手に)信じているのです。

偶然の中に必然を読み取る。偶然と必然のパラドックスの一致、——これが「出会い」の根本構造である、といえましょう。

必然的なもの、何か運命のようなものを出会いの中に嗅ぎ取り、読み取るわけですから、わたしたちは何よりも「考え」なければなりません。なんとかそれを嗅ぎ取り、読み取ろうと努力しなければなりません。出会いによつてひとは成長します。深くものごとを考えるようになります。

しかしここに第二の「パラドックス」が起きます。出会いの意味は、意外に当人が忘れてしまった頃に、思わずにじみ出てくるのです。そんなことはとつくと忘れ、なにか別のことに夢中になっていた最中に、突然あるいはしみじみと浮かび上がってくるのです。「あつそうか。そういうことだったのか」と。出会いの意味を読み取ろうとわたしが努力し、もがいている最中にはまったく見えなかったのに、そんなことはまったく忘れて別のことに夢中になっているときに、その意味が豁然と見えてくる、露見してくるというわけです。としますと、出会いの意味は、わたしが努力して読み取るのですが、その実、その努力を忘却して放棄したときになつてはじめて見えてくる、訴えかけてくるといえましょう。主体であるわたしが主体を放棄したときに、むしろそれは語り出してくるわけです。その意味で、わたしはむしろ、出会いの意味によつて試されている、と表現した方がより適切かも知れません。よく「運命」だとか、「天の采配」だとか「神様のめぐり合わせ」だとかいいます。そんなものが実際にあるのかどうか、ここでは簡単には断定できませんが、こうした事態を思わず想定したくなること自体、いかに人間が出会いにおいて受け身の状態にあるかを物語っているのではないのでしょうか。「縁なき衆生は度し難し」といいますが、出会いはむしろなかに仕組まれ、そのなにかの意味はわたしたちに意図的に隠され、その真意を発見できるかどうかは結局、この出会いと取り組むわたしたち各人に委ねられ、そして試されているのです。出会いという出来事において人間は主人公ではなくてむしろ奴隷の状態なのです。わたしたち人間がなにかを考えるのではなくて、むしろなかによつて考えさせられているわけです。その意味で言えば、考えることは本来応答すること、身を開くこと、自己を棄却することだといえるのかもしれませんが。人間の主体性から出発する考えなど、もしかしたら、ただたんに自分の影を追っているだけのことなのかもしれません。わたしたち人間の側からする努力などむしろ天からの配慮のひとつのようなものにすぎないのかもしれませんが。親鸞の自然法爾、

ハイデガーの放下 (Gelassenheit) など、古来から深い思想家が一樣にそのことを指摘しています。

出会いは、「考えさせられる」、「読み取らせられる」、「応答させられる」、「自己を棄却させられる」といったパラドックスな構造をもつといえましょう。主体的な問題と見えながら、その実、従属的な、受動的な問題であるところにまた「出会いは」のパラドックスがあるといえましょう。

しかも、その際、この考えさせられ読み取らせられたもの、つまりわたしたちが手にする「結論(出会いの意味)」なるものはけつして画一的なものではありません。ひとそれぞれによつて、そこから得るものは違つております。「出会いは」にどのように応えるかはひとそれぞれであるわけです。しかもそれは一挙に転がり込んでくるわけでもないのです。むしろ、すこしずつ深化させられ、深められていくのです。直線的因果的というよりはむしろ螺旋的に、いや飛躍的直感的に覚醒させられていくのです。「そういうことだったのか」と、ずいぶん後になつてハツと気づかされます。ぐるぐると旋回するように深まつて見えてくるのです。これが出会いの第三のパラドックスといえましょう。出会いは、いわば瞬時のことでありながら、その意味は永い時を求めてやまないのです。

瞬間は永遠にまさる。物理的な時計で計れば、出会いは瞬間にすぎませんが、しかしわたしたち人間存在からしますと、それは永遠の意味をもち、永遠の課題として各自に課せられるのです。

これまで、偶然と必然の一致とか、主体と客体の逆転とか、瞬間は永遠にまさるとか話してきました。ともあれ、出会いの意味はそんな形で見えてきます。それも、ただそう「見える」だけでなく、「決定的な重要性をもつ事件」として、エポック・メイキング(画期的)なものとして、わたしに向かつて追つてきます。「あのひとに出会つたことがわたしの人生を変えた!」といった具合に。それ以前と以後とではまるで違う、なにか生まれ変わったかのような、とい

うことです。出会いはエポック・メイキング、つまり画期性という構造を持つことになります。

以上の話から「出会い」の構造と意味をまとめておきましょう。「出会い」とは、偶然のことでありながら必然性をもつ出来事であり、各自の主体性の問題でありながらむしろ客体性が主役となる問題であり、瞬間の出来事でありながら永遠の意味を持つものであり、永遠の意味を持ちながらもけつして画一的ではなくて各人各様の問題であり、そのくせそのひとつにとってエポック・メイキングな意味を持つものだ、といえましょう。

さて、「考える」ことについて話して下さいと依頼されてきたのですが、こうして話をすすめていくうちに、「考える」ことはむしろ「考えさせられること」だと思えてきました。そして、「考える」についてはなく「出会い」について話題としてきましたが、そうしている間に、実は「考える」ことを実際に行っていることに気がつきました。それもそのはずです。出会い程にわたしたち人間にものごとを考えさせる出来事、つまりは事件はないからです。そして実は哲学はこの出会いからはじまったのです。

二 哲学と出会い——ソクラテスが教えたこと

出会いが哲学では決定重要な働きを演じてきております。すこし例をあげますと——。

マルクスはエンゲルスに出会っています。この出会いは「マルクス・エンゲルス」とひとつの名前のようになら

すが、もともとは別々です。そのマルクスに影響を与えたヘーゲルは学生時代、シェリング、ヘルダーリンと同じ寮に住み、この出会いをバネにして彼の巨大な体系哲学を構築しました。ニーチェは学生時代、文献学教授リッツェルに出会い大きな影響を受けています。ニーチェの場合、出会いをあげれば切りがない程でしょう。心理学者のちに友人となるパウ・レーと出会っていますし、音楽家のワグナー、歴史家のブルックハルトとの出会いも有名です。そうそう、天才女性ルー・ザロメとの出会いも忘れてはなりません。ニーチェの名著『ツアラツストラはこう語った』はルーとの出会いから刺激されて出来たと彼女はのちに述べています。女性との出会いと言えば、キルケゴールのレギーネ・オルセンとの出会いも忘れてはなりません。面白いことに、このふたりの実存哲学者の女性に対する態度はまったく逆になっています。ニーチェは（ルーの影響かどうかは知りませんが）女嫌いになり、キルケゴールはオルセンという女性に全著作を捧げています。

ハイデガーはフッサールとの出会いから『存在と時間』を書きましたし、カントはルソーの著作との出会い、その日は日課の散歩を忘れてしまったといえますし、この出会いから『純粋理性批判』の構造のひとつを思い描いたともいえます。

日本でも、哲学者西田幾多郎は高校時代の恩師北條時敬との出会いについて語っております。有名なのは、親鸞と法然の出会いでしょう。親鸞は、「たとひ法然聖人にすかさされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。」（唯円『歎異抄』）と述べたと唯円は伝えております。「地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」とは凄い言葉、凄い出会いですが、しかし出会いの一面を鋭く突いた言葉ではありません。親鸞の他力本願はあまりにも有名ですがこれは文字だけで理解するのではなく、ふたりの出会いの凄みではないかと、もう一度考え直

す必要があるでしょう。本居宣長は奥居おくいの大人、賀茂真淵と出会って、彼の畢竟の大作『古事記伝』を完成しますが、『玉勝間』によるとふたりの出会いは「此里に一夜やどり給へりしをり、一度のみなりき」と述べています(二の巻四五)。

その他にも、孔子、ブツダ、ソクラテス、イエスの出会いがあります。いや、人類の歴史は、これら四人の聖人を境にして大きく、劇的に変わったという点からいえば、彼ら四人の出会いが歴史的事件であったといえましょうし、人類の歴史とは畢竟彼ら四人の出会いに対する注釈にすぎないのであり、文化とはその注釈作業そのものだといっても過言ではないでしょう。この四人のなした出会いからわたしたち人類がえたものは計り知れないものがあるといえましょう。まさに彼らの出会いこそ人類の歴史におけるエポック・メイキングな出来事であったということができるといえます。

いうまでもなく、哲学の歴史において忘れることのできない決定的な重要な出会いは「ソクラテスとプラトンとの出会い」でした。このふたりの出会いによってはじめてわたしたち人類は哲学 (philosophia) を知ることになり、哲学というこの謎を教えられることになったのです。ふたりの出会いは紀元前四〇七年の出来事だったといわれています。今から二四〇〇年前の出来事で古代ギリシアの話です。

不思議なことに、ソクラテスは著作を残しておりません。その点でいえば、孔子もブツタもイエスも著作を残しておりません。彼らの教えというのは彼らの弟子の手によって伝えられてきたのです。考えてみれば、彼ら四人はまさしく出会いによってはじめて成り立ったのだといえましょう。

ソクラテスといえれば哲学者ですが、いわゆるその「ソクラテス像」とは実は弟子のプラトンが作り上げたものだったのです。プラトンはソクラテスに出会い、彼から決定的な影響を受け、ソクラテスとの対話を書き残したわけです。ソクラテスとは、プラトンの目に映った「ソクラテス」、ソクラテスとの出会いから読み取られ、掘り下げられ、深く意

味づけされた“ソクラテス”であつたことになりましょう。しかも興味深いのは、プラトンがソクラテスに出会った期間はわずか八年にすぎなかつたのです。わずか八年の出会いが、以降二四〇〇年にも及ぶ壮大な哲学の歴史を生み出すことになっていくのです。なんと、いふ凄惨な出会いだつたのでしょうか。

親鸞が法然に接したのは六年間。宣長が真淵に会つたのがわずかに「二度のみ」。そしてプラトンがソクラテスに接した期間が八年。ひととひととの“接触”は、けつして量の多少ではないのです。さき程「出会い」の構造を述べて、偶然のことでありながら必然性をもつ事件であり、各自の主体性の問題でありながら客体性の方が主役となる問題であり、瞬間の出来事でありながら永遠の意味をもつものであり、永遠の意味をもちながらもけつして画一的でなくて、各人各様の問題であり、そのくせそのひとにとってエポック・メイキングな意味をもつ、と定義しましたが、ソクラテスとプラトンの出会いはまさしくそうした出会いであつたといえましょう。

哲学者のエピソードを書き残したディオゲオス、ラエルティウスは、「翌日、プラトンは生徒としてまねかれた。そしてその後、彼はソクラテスの中に自分の夢の白鳥を見た。」と簡単に述べています。これではふたりの出会いはよくわかりません。プラトン自身は——おそらくソクラテスを念頭においているでしょう——こんなふうに『饗宴』の中で述べています。

「実際、このひとの話を書くことに、それによって、狂躁的なコリュパスたちよりもはるかに激しくぼくの心臓は動悸を打ち涙は流れ出るのだ。そしてこれと同じ経験をする人間を、ぼくはほかにたくさん見ているのだ。」

『第七書簡』の中でもプラトンはソクラテスについてつぎのように述べています。

「わたしと親しくなつた年上のひと、というのはソクラテスのことですが、そのひとをほくは、ほとんどためらいもなく、当時生きていたすべてのひとびとの中でもっとも公正な人物といいきることができましよう……と。」²⁷

ソクラテスとの出会いをプラトンはこんなふうを描いています。この出会いでソクラテスに「教えられたもの」——それが哲学、つまり「知識への愛求」であり、イデアの思想、たつたのです。感覚は誤謬に満ちているが、しかしイデアは普遍であり、この普遍のイデアを認識すれば永遠の真理を得るはずだということです。

では、そのイデアとはなにか。そのイデアはどうやったらかつつかめるのか。そもそもそのイデアはどこにあるのか。——プラトンにこの謎が残されます。いや、プラトン以降のひとびとにこの謎が残されます。

イギリスの哲学者ホワイトヘッドはつぎのように述べています。「ヨーロッパ哲学伝統のもっとも安全な一般的性格づけは、それがプラトンについての一連の脚注からなつていふことである。」²⁸哲学はヨーロッパで起こりましたが、それは結局のところ、プラトンの脚注の歴史に他ならないと述べているのです。

ドイツの哲学者ハイデガーも、表現は違いますが、同じ内容のことをつぎのように述べています。「プラトンが存在をイデアと解釈して以来、形而上学が西洋の哲学の本質にはつきりと刻印を残している。哲学の歴史とは、プラトンからニーチェに至るまで形而上学の歴史なのである。…すべての西洋の哲学はプラトン主義である。…プラトンは西洋の歴史において哲学者の原型となっている。」²⁹（ハイデガー『ニーチェ』）

ヨーロッパの哲学の歴史は二千有余年を超えますが、しかしその歴史はただひたすらプラトンについての解釈にすぎなかつた、というのです。そして、このプラトンの思想とは、さき程述べましたように、ソクラテスとの出会いから生まれたわけですから、ヨーロッパの哲学は、簡単にいえば、ソクラテスとプラトンの出会いにはじまるといつても差し支えないのです。としますと、どうでしょうか。哲学において出会いがいかに重要な働きをなしてきたのがおわかりになるのではないのでしょうか。

哲学は、プラトンとソクラテスとの出会いから生まれてきたのです。哲学が実り豊かな果実を結び続けたのもその出会いにあつたのです。いや、出会いが劇的であつたからこそそれだけの実りをもたらしたといえましょう。

では、現代においても実り豊かに結実させ続けているのでしょうか。わたしたちの時代もこれまでと変わらず実に豊かに思索しているのでしょうか。そのように考えてきますと、わたしたちは不安に陥れられてしまいます。もしかしたら、現代人はなにも考えていないのではないかと。

三 現代と出会い——考えることの喪失の時代

はたして現代とはどのような時代でしょうか。

この問いに対してはいろいろな解答があるでしょうが、現代が大量生産と大量消費を世界的な規模で追求している時代であることに反対するひとはいないと思います。現代はまさしく「産業社会」であるといえましょう。この「産業社

会”は、皆さんもご存知のように、一八世紀後半にイギリスにはじまり、世界的な規模にまで広がったものです。この革命は世界のすみずみまで達し、わたしたち人間の生活を根底から変えた、といつても過言ではないと思います。それまでの生活は一変してしまいました。技術の進歩によって同一で均質な商品、さらには情報までが大量に生産され、世界のすみずみにばらまかれます。世界中のひとびとが同じモードを追い求め、同じ自動車に乗り、同じ映画を観、同じ価値観をもち、同じ言葉をしゃべるようになりました。世界の片隅で起った事件は瞬時に世界中のひとびとに知られ、どこかで流行するものはまた世界中に流布されます。この産業社会の波をのがれることは、おそらく不可能でありましよう。

この産業社会の産み出す大量消費・大量生産によって世界のひとびとの生活は同一化・均質化・平均化しはじめていきます。成田の飛行場とパリの飛行場を一度見比べてみてください。細かな文字などに気が付かないかぎりおそらく区別がつかないと思います。空港から続く自動車道路・鉄道などもまったく同じです。世界に目を向けなくても新幹線の駅などを較べてみてください。どこも同じ形をしていて、同じ店が同じ商品売っていることに気がつくはずですよ。こうした産業化・同一化・均質化・平均化の流れの中で、残念ながら、個性が急激に失われつつあります。地域性も言語や慣習の特殊性も、宗教や歴史までもが失われています。かつて、人間は手を使うからこそ人間であるといわれて、手仕事や職人芸は尊ばれたものです。しかし現在、それは失われつつあります。職人も手仕事も、伝統芸も農業もいらないのです。

こうして街並、生活、服装が世界中で同じものになり、ひとびとの個性も失われ、よく見ると、ひとびとの顔も同一化、均質化、平均化してしまったことに気がつくはずですよ。“モード社会”、“コピー社会”の中で同じような人間が大

量に生産されはじめています。アメリカの映画を観て、中国の映画を観ても、そこに違和感がないどころか、まったく同じ画一的な反応さえひとびとは示しているのです。

事物にも人間にも個性がなくなつた時代——。それが現代だ、といえましょう。個性の喪失です。顔のない時代——といつてもよいでしょう。故郷喪失の時代——といつてもよいと思います。なにしろ地域の個性は喪失したのですから。

こういう時代に、はたして本当の意味での「出会」はあるのでしょうか。ひととひととは本当に「出会う」ことができるのでしょうか。わたしは疑わしいと思っています。

ひとびとは同じ顔をして、同じ考え方をして、同じ生活のリズムの中で「生活」しているところにまだ出会いはあるのでしょうか。大衆、つまりは誰でもないひとびとに出会いはまだ可能なのでしょうか。出会いとは、偶然のことでありながら必然性をもつ事件であり、各自の主体性の問題でありながら客体の方が主役となる問題であり、瞬間の出来事でありながら永遠の意味をもつものであり、永遠の意味をもちながらもけつして画一的でなく、各人各様の問題であり、そのくせ、そのひとにとつてのエポック・メイキングな意味をもつと語りましたが、そうした出会いはまだ可能なのでしょうか。

もちろん、現代においても、ひととひととが遭遇することはあるでしょう。しかし、よく考えると、なんらかの意図、仕組みがそこには隠されているのではないのでしょうか。一見、表面から見ると、昔の出会いのような様相を見せながらも、その実、その裏でちゃんと「仕組み」されているのです。出会い系サイトやネットンや合コンなどを思い浮かべてください。最近の学生などは、友人や恋人と出会うのはこういう機会を利用するしかないと思つているほどなのです。こ

うなると、ひとと出会うのではなくて、どの仕組みを利用するか。誰と出会うかではなくてどうやって劇的に出会うか。こちらの方に力点が移ってしまいます。どういう仕組みを利用して、どうやって出会うのか。旅行なども本当は見知らぬ場所と出会うはずなのですが、最近ではどこでなにを見るかということよりも、どの手段を使って、どんなふうに行くかということの方に力点、関心が移ってしまって、結局は「どこに行っても同じ!」ということになってしまっているようです。

デイズニールンドやユニバーサル・スタジオといった「テーマパーク」(一)にひとびとがなぜ行くのか。その哲学的真理が知りたいところです。

どこに行っても同じ!つまり——、わたしたちは現代において他所よそのものとの接触を喪失してしまっているのです。出会いが忘却され、他所よその場所を見ることもなく、見知らぬ場所と出会うこともなく、ただ旅行をしているのです。その方が安心だからでしょう。そんなふうには他所よそのものと出会うことがないので、その他所よそのものに大きな刺激を受けて、ものごとを深く考えることもなくなってしまう。

出会いが喪失した時代——。それがわたしたちの時代ではないでしょうか。本当の出会いが喪失してしまったから、これまで知らなかったことを知ること、また知ろうとする意欲も起らない。そんな見知のものを知らうとも、出会ってみようとも思わないから、大きな根底をゆるがせるような衝激も刺激もない。したがって、頭を傾けてものごとを深く考えることもない。それが現代ではないでしょうか。

もちろん、現代でも考えることがないわけではありません。新聞やテレビやコンピュータなどを通して、考えるべきことが多量に流し出されてきます。いや、考えるという意味ではわたしたちの時代ほど考える必要に迫られている時

代はないともいえましよう。しかし、自分から見知らぬなかに出会い、その謎と格闘し、悶々とするこのなくなつた時代という意味でいえば、わたしたちの時代ほどなにも考えなくなつた時代はなかつた(！)ともいえるのです。

- (1) 本講演は、一九九四年九月九日(金)に「出会いの忘れ」と題して栃木県小山市の生井大学(生井公民館)で話したものに加筆訂正したものです。生井大学ではその年「出会い」というテーマで計五回の講演がありました。
- (2) 泉鏡花「義血侠血」、岩波文庫『外科室・海城発電』一九九一年、岩波書店、二八―三二頁。
- (3) 同書、三八―四〇頁。
- (4) Blaise Pascal, *Pensees et Opuscules Classiques* Hachette, 162.
- (5) Diogenes Laertius, *Lives of eminent Philosophers*, Loeb classical Library, Harvard University Press, 1925, P.280.
- (6) Platonis Opera, Oxford Classical Texts, 1973, 215d-e.
- (7) *Ibid.*, 324d-e.
- (8) ホワイトヘッド『過程と実在(上)』(ホワイトヘッド著作集第十卷)山本誠作訳・松籟社、一九八四年・六十六頁。
- (9) Martin Heidegger, "Nietzsche II", 1961, Neske, S.220.

(本学法学部教授)